

次世代の模型を構造設計に 構造家・田村尚士

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■名古屋大学での学び

生まれ故郷の名古屋で活動する田村尚士さんは1982年に生まれた。父は施工図を描く会社を営み、伯父も意匠設計事務所をしていたのもあり、建築へ進むのは自然だった。建築を選んだ理由はもう一つある。フランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテルだ。窯業が有名な常滑市のタイルが使われているし、ライト本人も訪れたことを聞いて感動したからという。田村さんは父と伯父が学んだ名古屋大学の工学部に進んだ。4年生から研究室は大森博司教授の元で大学院まで研究に集中したのだった。遺伝的アルゴリズムで鉄骨の断面を最適化し、プログラミングも研究していたという田村さんは工学博士でもある。

そのころの名古屋大学工学部は教授陣が充実していて、中でも佐々木睦朗教授が着任し、後に小説家になった森博嗣氏が建築構造の助教授として在籍していた。物の見方が独特な森氏から受けた衝撃は今も鮮烈だという。「問題を見つけることは解決するより難しい」の言葉は忘れない。田村さんは学びに明け暮れた学究生活だったのです。

■構造家、金箱温春からの学び

就職は金箱構造設計事務所に行きたいと思った。わずか一週間インターンシップをただけであったが、先輩から聞いていた通り素晴らしい所長なのであった。「金箱さんのバランスのよい設計姿勢と、人柄に惹かれて…」どうしても入りたかったので模型をつくって持参して合格したという。

仕事が始まってすぐに世界が変わった。それまでは、入力したらコンピュータが結果を出してくれるのが構造設計だと認識していた。「こんなに泥臭いのが構造設計なのか」と、超アナログなプロセスに衝撃だったという。金箱さんは所員を一人の構造設計者として認め、自由に考えを伸ばしてくれた。「お陰

で自主性が高められ、見守ってもらっているという安心感の元で仕事ができた」。7年間で約50件の設計を担当させてもらったのが宝だ。千葉学建築計画事務所+小川晋一都市建築設計事務所+西沢立衛建築設計事務所の設計したToreformや、元倉真琴+伊藤麻理設計のサイエンスヒルズこまつを担当され、設計プロセスを含めて、思い出深い建物であったという。

父親の他界で郷里に帰ることにしたが、当時金箱さんは「これからもいて欲しかった所員に去られた」と語っていたらしい。田村さんを指していたのかもしれないとは覇志堂の言である。

■構造模型でコミュニケーションを

父の残した会社ディックスを共同経営しつつ、構造家としても活動している。デジタル技術による構造設計の教育と実践が特徴的で、大学時代の研究を活かした構造設計支援ソフト「EEL」を自社開発し、一般公開している。さらにラムダデジタルエンジニアリングを創設し、3Dプリント模型サービス「NOVAS」をこの度リリースした。模型が設計者と施工者とのコミュニケーションの架け橋となり、安全な建物がつくられてほしいと祈りをこめている。

金箱構造設計の30周年のお祝いに、金箱さんが設立当時に設計した建物の模型を有志と贈ったという。そのときの金箱さんの嬉しそうな顔、その師の様子からNOVASの未来を確信した。田村さんのセールスエンジニアの道は始まったばかりです。

田村さんの趣味は「子育て」だという。近頃は構造家に限らず一線で活躍する男性にも、子育てを担うのは自然になってきている、仕事優先から、子育てを楽しむ時代になっているのです。

入力したら設計が上がると思っていた人が、構造設計だけでなく金箱温春さんからバランス感覚も深く学んだようです。

